
アイドルマスター ~BattleGirls~

たけにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルマスター ～Battle Girls～

【Nコード】

N9506Z

【作者名】

たけにゃん

【あらすじ】

いつもと変わらず始まっていくはずだった日常。

しかし、異世界への扉が開かれた時アイドル達は冒険の部隊へと引き込まれる

元の生活に戻るため、アイドル達は力を合わせて進んでいく

ステージ1：はじめは…（前書き）

作者は今回のアニメ放送があるまで通常のアイマスを知りませんでした。（ゼノグラフィシアのみ）

そのため、多少設定等が違っていたりする事もあるかと思いますがご了承くださいです

ステージ1：はじまりは…

それはいつもと変わらない日常だった。

765プロダクション最大のステージを大成功で幕を下ろしてから
数日…。。

また、各々の仕事に忙しい日々が続いていた。

そんな中、事務所にて何かを見つめている人物が二人。

765プロダクション所属のアイドル、我那覇響と双海真美であつた。

真美「これって所謂テレビゲームだよね」

響「こないだ福引きで当ててきたんだぞ」

机の上には先程二人が話していたゲームソフトの入った箱が一つ置いてあつた。

真美「でも凄いよね・・・いおりん・・・ゲーム機用意してくれたし」

響「早速やってみるさー」

真美「って、ゲーム起動はこうやって・・・」

やり方がぎこちない響に代わり、真美がゲームのセッティングを行

っっていく。

同時刻、事務所近くの道を歩いていた二人の人物。

765プロダクションのプロデューサーと元・アイドルで新たに誕生したユニット【竜宮小町】のプロデューサー秋月律子であった。

律子「あのライブ以降、また忙しくなりましたね」

プロデューサー「みんなが顔をあわせるのは少なくなるけど、夢に向かって進んでいるからいいと思いますよ」

事務所に向けて歩んでいる二人。

そして、響・真美はゲームを起動させていた。

真美「そう言えばどんなゲームなの？」

響「冒険するものらしいぞ」

と、画面一杯に光が広がり始めた。

すると二人に小さな異変が起こり始めていた。

真美（何だろ・・・ぼんやりしてきた・・・）

響（何か凄そうな・・・ゲーム・・・だぞ・・・）

そして画面に広がっていた光は、画面を飛び出し響と真美を包み込んでいく。

プロデューサー「ん？」

丁度その時、事務所の扉の前に辿り着いていた二人。

律子「テレビの光にしては明るいわね」

そう言いながら事務所の扉を開く律子。

すると先程まで溢れていた光は一瞬にしてなくなっていた。

そして、響・真美の姿も事務所内から消えてしまっていたのだった。

プロデューサー「律子・・・確か音無さんからの連絡で・・・」

律子「ええ・・・社長と一緒に出掛けることになって、丁度響と真美の二人が戻ってきたから留守番をお願いしたって」

辺りを見渡すプロデューサーと律子。

すると、起動したままのテレビゲームに気付いた律子。

律子「こんな物・・・事務所にあつたかしら・・・」

とその時、突然画面に光が映し出され否応なしに律子の瞳の中に飛び込んできた。

律子「えっ・・・」

瞬時に嫌な感じを悟った律子であったが、すでに身体に力が入らな

くなっておりその場を離れることができないでいた。

律子（これって・・・ダメ・・・っ・・・）

プロデューサー「律子！」

と、テレビと律子の上に割って入ったプロデューサーは律子を画面から遠ざけた。

プロデューサー「こいつかつ！」

そして、コンセントからテレビゲームの電源を抜くと画面の光はプツリと消え真っ暗になった。

律子「・・・っ・・・」

と、いきなりその場に座り込んだ律子。

プロデューサー「律子、しっかりするんだ」

律子「大丈夫・・・だと思っ・・・」

プロデューサーに支えられソファーに座らせられた。

律子（意識の全てが吸い込まれていく感じだった・・・）

プロデューサー「...律子、今日事務所に戻ってこれるアイドル達は何人くらいだ？」

律子「えっ、えっと...私はこれから竜宮小町の三人と合流して打ち

合わせするからこつちに寄れますけど」「

プロデューサー「俺も千早の所について打ち合わせがあるから……千早は大丈夫だ」

律子「プロデューサー……何かわかったんですか？」

プロデューサー「……夜に集まろう……集まれるメンバーだけでも……」

厳しい表情を見せていたプロデューサー。

不安な気持ちを抱えたまま、二人は仕事の為事務所をあとにするのであった。

ステージ2：謎のゲーム

再び静かになった765プロダクションの事務所。

そして、いなくなってしまった響と真美はと言つと…。

響「ん・・・!?!」

と、いきなり起き上がり辺りを見渡す響。

響「ここ、どこだ？」

響が今いる場所は、街の中でも事務所の中でもなく木々が生い茂った場所にいた。

と、響は近くで倒れていた真美を発見した。

響「しつかりするさー」

真美の身体をユサユサしていると、しばらくして真美が意識を取り戻した。

真美「あれ・・・ひびきん？」

まだはつきりしない意識の中で、響の存在を確認する真美。

響「ここ、何処だかわかるか？」

真美「事務所でゲームやってたはずなのに・・・」

と、その時頭上の木々の枝葉がガサガサと揺れ始めた。

響「??？」

そして次の瞬間、何かが二人目掛けて落下してきたのであった。

- - - -

現実世界・765プロダクション事務所。

今ここには、四人の人物が揃っていた。

高木社長「うむ・・・それが君の見解か」

プロデューサー「には信じられませんが・・・」

そして心配な表情をしている女の子が二人。

如月千早と音無小鳥であった。

千早「二人とも・・・無事よね・・・」

プロデューサー「千早・・・」

と、いきなり事務所の扉が勢いよく開かれた。

律子「ちよつと、伊織!？」

真っ先に事務所内に入ってきた女の子・水瀬伊織。

プロデューサー「伊織？」

伊織「これが全て悪いんでしょ！こんな物叩き壊して・・・」

と、ゲーム機に伸ばした伊織の手を小鳥が止めた。

小鳥「本当にこのゲームの世界に飛ばされたのなら、壊しちゃった
ら戻ってこれなくなるかもしれないですよ」

伊織「・・・っ・・・」

亜美「兄ちゃん・・・真美は・・・真美は戻ってくるよね」

プロデューサー「きっと大丈夫だ。何とかする」

高木社長「とはいえ・・・これ以上誰かが引き込まれては大変だ。
皆、これには近付かないよう・・・」

あずさ「でもコンセントから抜いてあるんだから大丈夫ですよね」

律子「そうね・・・ただ問題が一つ・・・」

小鳥「はい・・・明日からの仕事が・・・」

プロデューサー「それは俺が話をして来ます。この件については話
しても信じてもらえないでしょうから、上手くやって来ます」

高木社長「大変だと思いが頑張ってくれたまえ。私や音無君も出来
る限りの事をやってみよう」

そんなこんなで、複雑な気持ちのままこの日を終える765プロダクシヨンの面々。

だがこれは、まだ始まりにすぎなかったのである。

ステージ3：区切られた世界

現実世界で夜を迎えた頃……。

異世界の響と真美はようやく街に辿り着いていた。

響「な……な……」

真美「ひびきん……無理して【なんくるないさー】って言わなくていいよ」

街についたとたん緊張がとけ力が抜けたのか、その場に座り込んでしまった響。

真美「とりあえず休める場所に行こうよ」

と言う真美の言葉を受けて、街の宿屋で休む事となった。

響「でもまさかあんな状況になるなんて思ってないさ」

ふと少し前の出来事を思い出す響。

- - -

響・真美「!?!」

二人に落ちてきたのは手のひらサイズの魔物だった。

響「このっ!」

魔物達を蹴散らしていく響。

真美「……やつ……」

だが真美の方は次々と来る魔物達を対処しきれずにいた。

響「じっとしてるさ！」

響は粗っぽくも華麗に真美から魔物を取り払っていく。

真美「ひ、ひびきん……」

響「こんなのと戦ってられない……走るぞ！」

行く先が何処に通じているかわからないが、ただ魔物達から逃げるために木々の中を走り抜けていく二人。

幸いにも魔物達の移動速度は遅く、前方に光が見えた頃には魔物達を上手くまいていた。

響「出口……だぞっ！」

- - -

真美「で、木々を抜けて外に飛び込んだらその先にこの街が見えたんだよね」

響「とにかく……お腹空いたぞ……」

真美「もう夕御飯の時間だしね・・・」

しかしながら二人はここである危機に直面した。

響「私達のお金が通用しないぞ・・・」

真美「宿は一泊だけならって無料だったから・・・」

魔物達から全力で逃げてきた二人にのし掛かる精神的なダメージ。

？「お前達のような奴等がこの世界の命運を握っているとはな・・・

」

真美「ふえ？」

いきなり声が出て振り返ると一人の女性が立っていた。

？「試してやる」

と、女性はいきなり真美に向け拳を降りおろした。

真美にヒットする直前、それを止めたのは響であった。

？「中々良い動きだが・・・」

と、いきなり身体の動きを変えると響の腕を取り放り投げた。

真美「ひびきん！」

響「ぐっ・・・」

上手く着地したものの、体力と精神力の疲労はピークを迎えていた。

響「こんなの・・・なんくる・・・ないさー！」

と、最後の力でダッシュし女性の身体に体当たりをぶちかました響。

？「・・・なるほどな・・・少しは認めるとしようか」

女性はそう呟くと、力尽き倒れそうになった響を支えた。

？「宿に連れていく。お前も来い」

真美「えっ・・・う、うん・・・」

目の前で起きている出来事に動揺しながらも女性についていく真美。

そして、夜が明け・・・。

響「ん・・・ん？」

真美「ひびきん！」

？「ようやく目覚めか・・・しかし、食事し終わった瞬間に意識を失うとは」

響「お前っ・・・!？」

起き上がり飛びかかろうとした響だが、身体の痛みがそれをとどまらせた。

真美「ひびきん、この人は悪い人じゃないよ」

クリス「自己紹介が遅れたな。私はクリス。伝説に従い旅をしている」

響「伝説って・・・ワケわからないさ」

クリス「お前達の世界ではそうだろうな・・・だが、私の一族が代々受け継いできた書物に記されたもの・・・この世界に災い起こりし時、異世界より戦士が舞い降りる・・・とな」

真美「私達が？」

クリス「何も知らずにこの世界を歩かれては危険だ・・・簡単に説明してやる」

クリスは紙を用意し簡潔にこの世界を説明していく。

響「1000のエリアに区切られた世界!？」

真美「・・・」

クリス「災いを引き起こしている敵は、エリアの最奥・・・1000番目のエリアにいる」

響「1000個のエリアを順々に巡るのは大変なんだぞ」

クリス「心配はいらない。その時が来たら説明しよう」

真美「……」

響「真美、元気ないな」

真美「亜美や兄ちゃん達に会いたくなって……」

クリス「……出発しよう……その会いたい人と再会したいのから速く敵を倒せばいい」

響「やるぞ、真美。やって元の世界に戻るんだぞ」

真美「……そうだよね……頑張らなくちゃ……」

クリス「と忘れていたな……街を出る前にお前達を強化しておかないとな」

そう告げたクリスなのであった。

ステージ4：旅立ちと異変

クリスに引き連れられ、とある店に入っていく響と真美。

クリス「まあ、様になっているじゃないか」

クリスが購入してくれた衣服に着替えさせられた響と真美。

響「これ、動きやすいぞ！」

真美「何か私服と同じで軽装だね」

クリス「お前達のカじや戦士の装備は重すぎるだろ。身軽な方がまだマシだ。攻撃を耐えるのではなく、かわしていけ」

と、クリスは響と真美を観察する。

クリス「次は戦闘方法の確立だが・・・」

真美「戦闘方法！？つて、真美達戦いなんて出来ないよ！」

クリス「街の外から来たのならわかっているだろ。魔物達がごろついていただろ」

響「あれだな・・・」

クリス「響と言ったか・・・お前は武器よりも己の腕脚で戦った方が良さそうだ」

響「パンチとかキックか……」

真美「じゃあ……真美は……」

クリス「響より非力みたいだしな……こいつはどつだ？」

と、クリスは真美に銃を手渡した。

真美「えーっ！真美、こんなの使えないよ！」

クリス「剣を振るうよりは使えるはずだ。それに、そいつは通常の弾丸を使うわけじゃない」

真美「どういうこと？」

クリス「二つの腕輪とペンダントを身に付ける。銃とそれらの関係性は説明書を読んでおけ」

真美「う、うん……」

戸惑いながら了承する真美。

クリス「その他必要なものは私が用意しておいた。では行くぞ、有無を言わず強引に進めていくクリス。」

同じ頃……。

プロデューサー「えっ……」

響が今日行く仕事場に行ったプロデューサーは驚きを隠せないでい

た。

男「だから我那覇響なんてアイドルつかってないって。と言つか知らないよ」

プロデューサー「・・・」

何度も誰に聞いても、響の存在が無かった事になっていた。

と、プロデューサーに律子から連絡が入った。

プロデューサー「・・・わかりました・・・じゃあまた夜に事務所で・・・」

割りと短時間で電話を終えたプロデューサー。

プロデューサー「響だけじゃなくて・・・真美まで・・・まさかあの件が原因で・・・」

困惑しながらも、次の仕事場に向かわなければならぬプロデューサーは仕方なくこの場を離れるのだった。

ステージ5：野生の猛攻

響「なんくるないさー!!」

気合いと共に襲ってくる魔物を蹴りで撃退する響。

真美「そう言えばさっきから、攻撃して魔物が消滅したらコインが落ちてるけど・・・」

クリス「それがこの世界での通貨だ。大切に持っている」

真美「・・・」

クリスや響が倒した魔物が落としたコインを拾っていく真美。

真美（真美・・・こんな戦い・・・続けていけないよ・・・）

街を出る前にクリスより貰った銃。

真美はまだ一度もそれを使ってはいなかった。

クリス「そろそろ気を引き締める」

と、真剣な表情になるクリス。

真美「えっ？」

クリス「私達が倒すべき敵はそれぞれのエリアに刺客を残していった。そいつを倒さねば次のエリアには進めない」

響「……」

と、いつの間にか響が険しい表情になっていた。

響「何か近付いてくるぞ」

クリス「来たか・・・エリア1の刺客、野獣・グリーズ」

グリーズ「グウオーツ！！」

まだ離れているにも関わらず、クリス達の所にまで届く雄叫び。

クリス（最初から厄介なのを置いていったな・・・まだ経験の浅い二人には・・・）

響「どうやって戦うんだ？」

クリス「私が仕掛ける。響は背後から、真美は援護を頼む」

響「了解だぞ」

真美「えっ・・・うん・・・」

そう返事すると初めてホルダーから銃を抜いた真美。

近づくグリーズから視線を反らさず、じっと動きを見ているクリスと響。

そして、グリーズが駆け出してきた瞬間クリスが行動を開始した。

クリス「グッ……」

力ではグリーズに分があるため、深く入り込まずにコンパクトに攻めていくクリス。

そして、クリスとグリーズの戦闘を見ながら立ち位置を変えつつ攻撃を繰り出す響。

響「こいつ、効いてる感じがしないぞ……それに何だか……」

クリス（ここでもたついてはられない……）

と、剣を構え一気にグリーズに駆け寄るクリス。

当然力任せにグリーズは頭上より、その太い腕を降り下ろし攻撃してきた。

クリス「っ……今だ真美！グリーズの顔を狙え！」

真美「えっ、えっと……」

焦りながら銃を構え照準を合わせる真美。

だが、引き金を引く瞬間真美は瞳を閉じてしまった。

クリス・響「!?」

標的を見ずに放った弾は、撃った反動も加わって違う方向に飛んでいった。

グリーズ「グオツ!!」

これを好機と見たのか、一気に力でクリスを押しつぶそうとするグリーズ。

響「させないさ!」

と、横に回り込んでいた響が飛び込みクリスをその場から救い出した。

響「!?!」

真美「あつ…ひびきん…」

クリス「響…お前肩を…」

響「こんなのかすり傷だぞ…それよりあいつを…」

だが、状況は悪い方向に向かって進んでいた。

先程の一件で、クリスが使っていた剣はグリーズの足元に落としてしまっていた。

更に、響も肩を負傷してしまった。

真美（真美が…真美がさつき失敗したから…クリス姉ちゃんもひびきんも…）

と、じっと銃を見つめる真美。

すると、真美が装備していたペンダントにはめ込まれた宝石が淡く赤く光り出した。

真美「えっ…」

そして、真美の両目も淡赤に染まっていった。

真美「あの魔物の胸元に何か…もやもやした感じの見える…」

クリス（真美に変化が…【あれ】の効果が出てきたのか）

そんな真美の変化は相手に対してではなかった。

真美「見える…今の真美の目なら…」

そう言つて銃を構えると真美にしか見えない赤いラインが銃からグリーズに向けて伸びていった。

クリス「伏せろ！」

真美とグリーズの間にいたクリス達は、その場に伏せた。

そして、二発目の銃弾。

両目に宿った不思議な力が自信もつけさせたのか、しっかりと最後まで標的を捉えていた。

グリーズ「!？」

真美の放った銃弾はグリーズの胸元にクリーンヒットした。

だが、銃弾を受けても全身をやめないグリーズは伏せているクリス達に襲いかかった。

響「！！」

と、いきなり立ち上がった響は両手を広げた。

クリス「何を！」

そして、響に振り下ろされるグリーズの攻撃。

だが、響にヒットする直前その攻撃が止まった。

響「やっぱりお前…こんな事やりたくなかったんだな」

と、グリーズを撫でる響。

クリス「どう言う事だ？」

真美「多分…だけど…さっき胸元に感じた何かで…凶暴になってたんじゃないかな…」

辛そうな表情を見せながらそう説明する真美。

響「そうか…本当は街の近くの森に暮らしてたのに…」

クリス「話せるのか？動物と」

響「動物はみんな家族だぞ」

と、その時目の前の大地の上に三つの扉が突如出現した。

クリス「敵の邪悪な力が消えたからか…倒す…選択肢はそれだけではなかったのだな」

と、グリーズは響をその腕に抱えた。

クリス「??」

響「ちょっとこのエリアの問題を解決してくるぞ」

クリス「おい、待て！もう次のエリアへの扉は開かれて…」

だが、その時突然その場に倒れこんだ真美。

響「真美!？」

クリス「そうだった。あのペンダントは…」

響「じゃあ、グリーズ。頼むぞ」

と、グリーズはクリスと真美も一緒に抱えて駆け出していった。

クリス「…お前という奴は…」

響「街にいたら真美を宿屋に預けてすぐに戻るからな」

そんな訳でクリス達は一度街へと戻って行くのであった。

ステージ6：次なるステージと新たな来訪者

クリス「一人でいくつもりか？」

響「大丈夫だぞ。グリーズもいるしな。じゃあ、真美の事頼んだぞ」

そして、響はグリーズと共に再び森へと突入していった。

それからしばらくした後…。

街の外にて待機していたクリスと真美。

クリス「疲労は取れたか？」

真美「クリス姉ちゃんくれた回復アイテムのおかげでバッチリ…
だけど…」

クリス「どうした？」

真美「クリス姉ちゃん…真美、足手まといじゃないよね」

突然そう告げた真美。

クリス「お前の援護がなければ私達はやられていた」

真美「でもでも…それはこのペンダントのおかげだし…」

クリス「だが、それをちゃんと使いこなしたのは真美だ。とはいえ
ペンダントは…」

真美「うん、ちゃんと説明書読んだから分かってる。無茶しないように頑張る」

そう意気込む真美。

響「解決してきたぞ！」

と、森より帰還してきた響。

グリーズ「ガウッ！」

グリーズも挨拶らしき声を上げた。

響「森の魔物達も倒したし、グリーズもこのエリアの他の動物達と仲良くな」

響とグリーズは手と手を触れ合わせた。

そして、三人は再び三つの扉の前へとやってきた。

クリス「もう夕方になるか…次のエリアについたら行動を考えよう」

真美「で、度の扉を選ぶの？」

クリス「簡単に説明すると、ここからは三つのエリアを選んで進める。エリア1から必ずしもエリア2へ行く必要はない」

響「でも、どれがどのエリアに行くか分からないみたいだぞ」

真美「勘で選ぶの？」

クリス「響、お前が一番勘が鋭そうだな。選んでみたらどうだ？」

響「了解だぞ。じゃあ、一番左に行くぞ」

そして、三人は新たなエリアへと進んでいった。

同じ頃…。

現実世界、765プロダクション事務所。

春香「何か今日おかしかったよね」

事務所に戻ってきた春香はそんな事を呟いていた。

春香「響ちゃんの話したらスタッフの人、誰も響ちゃんのこと知らないって…前に一緒にお仕事してたのに…プロデューサーさんならなにか知ってるかな」

と、ふとテーブルに置いてあるゲーム機を見つけた春香。

春香「誰か帰ってくるまでゲームやれって事かな？美希ちゃんとかがやるうとしてたのかな」

そう言いながらセッティングし始める春香。

春香「あんまりやったことないけど…よし、起動！」

そして、丁度事務所に帰ってきた千早は何か不安なものを感じて事

務所の扉を勢いよく開けた。

春香「…ふぁ…っ…」

千早「春香!？」

すでに春香は溢れる光の影響で、意識の半分を引きこまれていた。

千早「プロデューサーの話、本当なら…」

と、千早は瞳を閉じ春香に近付くとその場から春香を後方に引き離した。

春香「…あ…あれ…」

強制的に光から引き離され、春香は意識を取り戻していた。

千早「嘘…光を見なきゃ…大丈夫な…」

光に包まれただけで、千早の意識は光に引き込まれていく。

春香「えっ、千早ちゃん!？」

千早「は…春香…ゲームの電源を…抜いて…」

春香「えっと…えいっ!」

コンセントから電源を抜く春香。

しかし、僅かの差でそれは間に合わなかった。

千早「…春…香…プロデューサーや…みんなに…伝えて…これ以上…犠牲を出さないように…」

後ろから聞こえてきた言葉に春香が振り返ると、光と共に千早の姿はその場からなくなっていたのだった。

春香「千早ちゃん…」

自分の身に起きた事と、今日撃した事…春香には未だに状況が理解できないでいた。

高木社長「おや、春香君…私はさっきまで奥で電話してたんだが…一体何が…」

そう話しかける高木社長だが、春香は何も話す事が出来なかったのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9506z/>

アイドルマスター ~BattleGirls~

2012年1月2日07時46分発行